第2篇　貨幣の資本への転化

第4章　貨幣の資本への転化

第3節　労働力の購買と販売

（労働力は特別な商品）

ｐ.291　わが貨幣所有者は、流通部面の内部で、すなわち市場において、ある商品――それの使用価値とそのものが価値の源泉であるという独自な性質をもっている商品を、したがってそれの現実的消費そのものが労働の対象化であり、それゆえ価値創造である商品を、発見する幸運にめぐまれなければならないであろう。そして貨幣所有者は、市場でこのような独特な商品を――労働能力または労働力を、見いだすのである。

　Ｇ－Ｗ－Ｇ´→　貨幣は流通過程の最初と最後では価値が違って、プラスアルファがつくが、貨幣そのものに変化が起こるわけではない。品物を買う時も、売る時でも、貨幣そのものがことによって増えるわけではない。増えるのは、やはり途中に入っているＷとなる。

　Ｗという商品の使用価値そのものから生ずる。つまり、その商品を使うことによって、価値が増えるということ。問題は、消費することによって、価値が増えるような、そういう商品をさがすことだということになる。

　振り返って、使用価値というのは人間の労働の支出労働というエネルギーが支出され、それが固まったものが価値だということだった。すなわち、価値をつくり出すのは、人間の労働の支出である。価値をつくりだす商品というものは、Ｗ、ここでは労働力以外にあり得ない。それを幸いにも見つけ出したといっている。

（二重の意味で自由な労働）

ｐ.292　われわれが労働力または労働能力と言うのは、人間の肉体、生きた人格のうちに存在していて、彼がなんらかの種類の使用価値を生産するそのたびごとに運動させる肉体的および精神的諸能力の総体のことである。

大事なことは、労働力という商品は特別な性格をもった商品であるということ。

ｐ.292　自分の労働能力、自分の人格の自由な所有者でなければならない。労働力の所有者と貨幣所有者とは、市場で出会って互いに対等な商品所有者として関係を結ぶのであって…。

（労働力を売る自由）

労働力を売るとは、労働者になるということ。労働者になりたい人は、自由になれるという条件が必要である。

ｐ.292　この関係が続いていくためには、労働力の所有者がつねにただ一定の時間に限ってのみ労働力を売るということが必要である。

　身体を丸ごと売ってしまうと奴隷になってしまう。「やめる」と言える自由な人格が必要なのである。

（生産手段からの自由）

ｐ.294　貨幣所有者が労働力を市場で商品として見いだすための第2の本質的条件は、労働力の所有者が、自分の対象化された商品を売ることができないで、むしろ自分の生きた肉体のうちにのみ存在する自分の労働力そのものを商品として売りに出さなければならない、ということである。

「自分の労働の対象化された商品」：自分で品物をつくるということ。

自分で商品をつくって、それを売る。そのためには労働者は自分で生産手段を持っていなければならない。それができないということは、生産手段をもっていないということ。生産手段がなくて売るものは労働力しかない。

p.295　自由な、というのは、自由な人格としての自分の労働力を自分の商品として自由に処分するという意味と、他面では、売るべき他の商品をもっておらず、自分の労働力の実現のために必要ないっさいの物から解き放されて自由であるという意味との、二重の意味で、自由なということである。

商品をつくる能力のことを労働力、または労働能力といっている。この労働力を買うためにはさまざまな条件が必要だ。

1. 一つは、労働力をもった人が、身分とか、その他さまざまな条件にしばられないで、自分自身の労働力を自由に売ることができる。
2. 二つは、労働力の所有者と貨幣所有者とは、法律上平等でなければならない。

p.295　一方の側に貨幣または商品の所有者を、他方の側に自分の労働力の単なる所有者を‥。

　向かい合っているのは、歴史的な発展の結果である。

（歴史的発展の結果）

p.295　歴史上のあらゆる時代に共通な社会的関係でもない。

p.295　先行の歴史的発展の結果であり、多くの経済的変革の産物、すなわち社会的生産の一連の古い諸構成体の没落の産物である。

　二重の意味で自由になるためには、二重の意味での開放が行われなければならなかった。

1. 自由な人格－身分制度がなくなること。どこへ行っても自由であるという社会。
2. 生産者から生産手段をとりあげることが必要。→本源的蓄積。農民を土地から追い出す。職人が自分の道具で生産できないようになる。

　他方、資本の元になるのは」貨幣なので、貨幣が発展していかなければならない。

p.296　貨幣を考察するならば、貨幣は商品交換の一定の発展程度を前提する。

労働力しかないという、それも自由という。

　商品生産と貨幣は、かなり古い時代からあったが、もう一つ付け加えて「自由な労働力」が必要だったと言っている。

「何からの自由」は「何々がない」

という言い方。「お金から自由だ」

p.297　資本については事情は異なる。資本の歴史的な存在諸条件は、商品流通および貨幣流通とともにそこにあるという物語では決してない。

（自由な労働者は一つの世界史を含む）

p.297自由な労働者を市場で見いだす場合にのみ成立するのであり‥この歴史的条件は一つの世界史を包括する。

　この場合の資本とは、産業資本のことである。

「一つの世界史」；いままでとは全

く違った社会がそこに現れてくると

言っている。

　　　　　　　注　資本主義を特徴づけるものは、

労働力が商品になるということだ。

p.297注　したがって彼の労働が賃労働という形態で受け取る、…。

　賃労働：賃金をもらって労働力を売ること。

注　資本主義の定義の一番大事なところは、労働力が商品化されているということ。

（労働力という商品の価値）

労働力というのは商品であるから、一つの価値をもっている。

p.297　労働力の価値は、他のどの商品の価値とも同じく、この独特な物品の生産に、したがってまた再生産に必要な労働時間によって規定されている。

　商品の価値は、その商品の生産に必要な労働時間によって規定されているが、労働力も同じである。

**そこで、労働力の生産に必要な労働時間とは何か、ということになる。**

p.298　労働力の生産に必要な労働時間は、この生活諸手段の生産に必要な労働時間に帰着する。

（生活手段の価値）

労働力の価値は生活手段の価値で

ある。生活手段をどのようなレベル

で考えるかが、問題になる。「多くは

一国の文化段階に依存する」

したがって、…

p.208　したがって、労働力の価値規定は、他の商品の場合と対照的に、歴史的かつ社会慣行的な一要素を含んでいる。

「社会での一般的な平均的レベル」である。

その労働力の価値には、6時間の労働が含まれている。こ此れは仮定だが。そしてそれはお金にすると3シリングである。6時間、3シリングの仮定はその後、ずっと出てくる。

この当時の労働者の労働時間は、1日12時間が普通。12時間のうち、6時間の労働者の生活費、労働力の価値の部分であり、金額で表すと、それは3シリングという論建てとなっている。

p.304注　「すべての労働は、終了したあとで支払われる」

　労働力の価値は、商品の価値と同じように、流通に入る前に決まっている。つまり、資本家に雇われてから決まるのではなく、資本家に雇われる前に決まっている。だだ、実際には賃金は一定時間働いた後に支払われる。労働者が資本家に前貸ししている。

　　　　　 注　賃金をいつ払うかという問題である。月給は何日分だろうか。

　 「日給」制が一番性格で、前貸し期間

が短い。

　 イギリスの「現物支給制度」－石炭。

p.306　労働力の消費は、他のどの商品の消費とも同じく、市場すなわち流通部門の外で行われる。

　労働力の価値として、賃金が支払われる。それは等価交換である。等価交換であって、労働力の価値どおりに賃金が支払われるということが前提されている。

　等価交換からは資本家のもうけは出てこない。どこから出てくるのか。それは、その労働力がどのように使われているかー問題となる。

（生産という秘められた場所）

p.306　この二人のあとについて、生産という認められた場所に、〝無用の者立ち入るべからず〟と入口に掲示してあるその場所に、入っていこう。

p.306　自由、平等、所有、およびベンサムだけである。

ベンサム－功利主義者。各人が自分の利益を追求していくと世の中はうまくいく。　　　　　 了

「第3節　労働力の購買と販売」の的場読解〔超約「資本論」ｐ.118〕

労働力という商品の謎

Ｇ－Ｗのなかで何かが起きるしかない。労働力商品購入である。生きている人間の中から生み出されるものをつくる肉体的、精神的な能力。生きている生身の人間→買い置きができない。ある一定時間働いてもらうことしかできない。

生産においては、労働力商品は特殊な商品。他方、消費者において商品を超える存在である。

労働力商品はどこから生まれたか

労働力商品は、いつでも、どこにでもあるわけではない。労働力以外には外に売る術をもたない人たちが生まれたのは「最近」である。当然、無限の価値増殖を始める資本の方も、この労働力商品の発生と時を同じくする。

本文　資本はこれと違う。資本が存在する歴史的条件は、商品流通や貨幣流通があればいつもあるというものではない。資本は、生産手段そして生活手段の所有者が、自由な労働者を労働力の売り手として市場に見いだせるところでしか成立しない。そして、この一つの歴史的条件の中で生まれる。だから資本は、最初から社会的生産過程のある時代の始まりを告げるのである。

商品生産の中に資本主義が生まれるのは、労働力商品が市場に発生することによってである。資本は労働力商品存在を抜きに存在しない。

労働力の交換価値と使用価値の違い

労働力商品の価値－商品の所有者である人間が生きていくに足る「再生産」の費用できまる。その再生産に必要な値段、つまり労働時間こそが彼の交換価値となる。これは、労働者の質によっても異なる。客観的な議論はできない。その国の文化段階にも依存する。

労働力商品の使用価値－資本家のもとで働いて何かをつくっている労働となる。資本家にとって彼の欲望を充足する使用価値である。すなわち、この使用価値は労働者が働いている総労働時間となる。

資本家が使用価値のすべての時間に資本家が対価を払えば、使用価値と交換価値は一致する。それでは資本家は労働者を雇う意味がない。当然、交換価値として、つまり労賃として支払う額はそれより少ない。たいていの場合、先に払って

働かせることはしない。まず、働かせておいて、その労働力の支出を見ながら賃金を支払う。先に払ったら、この商品は逃げてしまう。

人間世界の富は、人間から生まれる

流通の不自然な等価交換の問題は、労働力の使用価値と交換価値の相違から生まれる。人間世界の富は、やはり人間から生まれる。それも人間を搾取することによって生まれるのである。

この関係は、あたかも等価交換のように見える。なぜなら、質と量を交換しているからである。質と量は比較しようがない。

労働力商品の使用価値は労働時間という量に還元でき、そして価値も時間に還元できる。明確な差ができる。

資本家は「機械がつくった」「労働に応じて支払っている」「資本家自らの発想による」と屁理屈をいうが、マルクスは「ベンサムの天国」と述べている。